一章　幼馴染の『ワンコ騎士』と結婚することになりました

床から足が離れるのは、もう何度目だろうか。

幼馴染の肩に抱き上げられているティナは、昨日も一昨日もあった光景なのを諦めの心境で思い返していた。

「やだっ、ティナとずっと一緒にいる！」

「我儘を言わないで速やかに下ろしなさい！　そして旦那様は仕事にいってらしてください！」

優秀な屋敷執事が、目をつり上げ厳しい現実を突きつける。

朝から、なんとも騒がしい。

ティナは屋敷の主人と執事が毎朝言い争うのは、そもそも一般的によくある光景なのかどうかを考えてしまう。

このたび〝嫁入り〟し、立派な屋敷に暮らすことになってしまって一週間を超えた。

騎士隊長の屋敷の奥様になってしまったティナは、艶のある長い漆黒の髪の他は、これといって目も引かない平凡な一九歳の村娘だった。

屋敷暮らしとは縁がなく、ここへ来るまで畑仕事を手伝っていた。

目の色はよくあるブラウン、身長も平均そこそこだ。全体的に細身であるせいで腰回りも小さくて、村の同性の友人達からは色気がないとも言われた。

（この結婚も、魅力がどうとかいう話じゃないのよね……）
残念ながら〝急な入籍〟には、話せば長いわけがあった。
先程からずっと、ティナを正面から抱き上げてぐずっているのは、同じ村出身のアラン・クライヴだ。
ティナは彼の幼馴染だった。彼は王侯貴族と勘違いされる美青年で、珍しいハニーブラウンの柔らかな髪に、母譲りのエメラルド色の瞳をしている。
長身で、今や立派な軍服に身を包んだ近衛騎士隊長。細見なのに軍人として鍛えてもいるので頼り甲斐がある、という風貌の完璧なイケメンに成長していた――。

――だがアランも、昔はとても小さい男の子だった。
王都から馬を飛ばして数時間、農村地帯にぽつんとあるバルドという小さな村で二人は産まれた。
住民の数は少なくて、同じ歳はティナとアランだけだった。
幼い頃のアランはよく泣いてばかりいて、ティナがいつも手を引いていた。それは物心付いた頃から、村ではすっかり馴染みの光景にもなっていた。
『ぐすっ。僕、騎士になる』
唐突にアランがそんなことを言った時、ティナはびっくりした。
彼は一三歳から王都と村を行き来し、才能でも開花したみたいに立派な騎士になった。そして一七歳という若さで、近衛騎士隊の隊長に就任した。

初の快挙に、村総出でお祝いした。仕事が忙しいこともあって上官達や両親からも、褒美として賜った屋敷で暮らすよう説得された。

『でも、必要のある間泊まるだけでいいかなって……』

『何を言っているんだ。立派な住まいを構えないと、嫁を迎えられないぞっ』

『そうだぞ。きちんと屋敷の使用人も雇い、住まいを整えるのも男の役目！』

両親達や立派な軍人達がいったいなんの方向で説得しているのかティナは分からなかったが、アランはしっかり頷き村人達に声援をもらっていた。

王都に住居を移したのち、活躍は一層増したおかげか彼は騎士爵となった。

そうすると、もう数ヶ月に一度しか村に戻って来られないようになった。

『アランも、村を卒業しちゃったのねぇ』

『うふふ、ティナもやっぱり寂しい？　顔が見たくなっちゃう？』

『いいえ？　数ヶ月に一度は顔を見ているし、無理せず一年で一回とかでもいいと思うの。アランに伝えたほうがいいかしら？』

『……そうなの……えっと』

『ウチの子には伝えないでおくわ……』

母を含めた女性陣に目を向けられたアランの母が、そんなことを言っていた。

その会話から季節がまた変わり、昨年の雪が溶けだした頃だった。

唐突に魔物の大量発生が起こり、国が討伐に乗り出すことになった。各地の支部部隊だけでなく、

国軍とアランの騎士部隊も派遣された。
彼が出陣して半年、国は大勝利を収めた。もっとも素晴らしい活躍を見せ短期決着に貢献したとして、アランも勲章が授与されるという吉報が村に届いた。
彼が八ヶ月も顔を見せなかった、最長記録の最中の嬉しい知らせだった。
バルド村の人間が騎士になっただけでなく、陛下からの勲章授与も初めてのことだ。
『これは目出度い！』
『これからの活躍がますます楽しみだね』
そんな村の人達と一緒になってティナも喜んだ。
王都でされるという授与式典、彼の今後の活躍を遠いこの村からずっと応援していよう――と思っていた矢先、国を上げたお祝いムードの中で大事件が起こった。
唐突にアランが単騎で村に飛び込み、ティナの実家に突撃してきたのだ。
『ティナッ、いる!?』
『えっ、どうしてアランがここに？』
扉を開けたティナは、そこに八ヶ月ぶりに見る幼馴染の姿があって驚いた。
アランは騎士隊長として着飾っており、どう見ても暇があったから立ち寄ったという感じではなくて、ティナは真っ先に心配になった。
『あなた大討伐の勝利を収めた主役の一人でしょう？　どうして今ここにいるの』
気付いた村人達が集まってきた、そう尋ねた直後にアランの涙腺が崩壊した。